慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 ジョン・レーの『経済学の主題に関する一定新原理の叙述』
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.12 (1935. 12) ,p.1879(123)- 1899(143)
JaLC DOI	10.14991/001.19351201-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19351201-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古版經濟書解題

ジョン・レーの『經濟學の主題に關する一定新原理の叙述』

高橋誠一郎

一

アダム・スミスは其の先人より傳承せる散漫なる資料を蒐集し、之れに脈絡と系統とを與へ、其の根柢に横はりつゝある原理を啓示し、以つて經濟學をして眞の科學たらしめたる彼れの事業に於いて殆んど何等有力なる反對論に遭遇することがなかつた。彼れの見解は彼れの生活せる時代の精神と一致した。恰も過ぎ去つたばかりの時代は、其の最悪の形態に於ける政府干渉の有害なる結果に逢着して、統治すること最も少なき國家は最も良く統治するものであると云ふ學說を承認せんとして居つた。此の時代の人民に取つては、富の生産を自然法の領域内に置き、思慮なき官吏をして無分別に之れを左右せしめざるの一事は、當時行はれつゝある親權的政體の弊害より免るゝを得可き唯一可能なる方策たるの觀があつた。第十八世紀は樂觀主義者の時代であつた。彼れ等は其の希望を新たなる界域に擴張するを許すものとしてアダム・スミスの意見を歡迎した。

然しながら、斯くの如き樂天的希望は遂に消散せしめられなければならなかつた。マルサス及びリカードオは彼

れ等の時代の人民をユートピア的理想から吾人の總べてが活き且つ働かざるを得ざる刻薄なる世界の嚴正なる實在に呼び戻した。而して國民主義者は、經濟現象の正確なる說明は是れ等のものが國民的見地から注視せらるる可きことを要求する旨を主張した。國民的福祉は經濟學に於ける主要なる問題でなければならぬ、而してそは屢々個人及び階級の其れと矛盾する。ローダデール伯はアダム・スミスが公の富を私の富と同一視せることを非難し、而して斯くの如きものは甚しく不條理なる推理を招來しつゝある重大なる誤謬たることを立證せんとした。『經濟學の主題に關する一定新原理の叙述』（Statement of some New Principles on the subject of Political Economy, exposing the fallacies of the system of Free Trade, and of some other doctrines maintained in the "Wealth of Nations," 1834.）の著者ジョン・レー（John Rae）も亦、ローダデール伯と幾多の共通點を有するものであつて、特に（一）國富は私富の蓄積に由つて增加せられ得るものであり、（二）私的及び國民的利益の間には自然的調和が存すると做すアダム・スミスの兩推定に批評を加へんとせるものである。

此の書は米國ヴァモント大學經濟學教授ミックスター（Charles Whitney Mixter）によつて一千九百〇五年『資本の社會學的理論』（The Sociological Theory of Capital being a complete reprint of the New Principles of Political Economy, 1834.）と題して翻刻せられてゐる。著者レーの傳記を知らんとする者は此の版本の Biographical Sketch. に據るを捷徑とする。（ibid., pp. xix-xlix.）然しながら、本書の內容は、不幸にして此のミックスター版に於いては、校訂者が一層論理的なる排列と思惟せる所のものに到達するが爲めに完膚なき改修を蒙つてゐる。改訂者は、本書の主要部分がアダム・スミスの學說に對する非難より成るに非ずして、資本の一般問題に關する獨自、精緻且つ深刻なる論述であるが故に、原版の表題を以つて不幸なる「誤稱」（misnomer）であつたと做してゐる。（ibid., p. xv.）而して彼れは今やレーの著作に附せられたる主たるインテレストに由り、數多の需要に應じて全然新たなる衣裳に於いて其の改訂版を公にすることが適當と認められた旨を述べてゐる。（ibid., p. xvi.）。而も蘇國アバーディーン大學經濟學教授アレグザンダー・グレーは、斯くの如き改訂を以つて、アダム・スミスが「最も不必要なる注意」と呼ぶ可き所のものであると做してゐる。然しながら、グレーは、此のミックスター版が入手最も容易なるの事實に基いて、其の著『經濟學說の發達』中に於ける本書の引用は全然之れに據つてゐる。（Alexander Gray, The Development of Economic Doctrine, 1931, p. 199. n.）。吾人は爰に一千八百三十四年の原版に依據してレーの『新原理』を解說せんとする。

二

本書原版は序文並びに附言の外、緒論、第一編、「個人的及び國民的利益は同一に非ず」、第二編、「資本（ストック）の本質並びに其の增減を支配しつゝある諸法則に就いて」、第三編、「國民的資本（ストック）に對する立法者の工作に就いて」並びに註記を併せて四百十四頁より成るものである。

彼れは「個人は概ね、共同基本のより大なる部分を獲得することによつて彼れ等の資本を增加することが極めて明かである」と主張する。或る人が漸次富裕と爲りつゝある間に、他の者は次第に貧困と化しつゝあるのである。而して惹起せられた變化は富の創造たるよりも寧ろ一方より他方への富の移動たるの觀がある。斯くの如き移動は世界の總べての時代に於いて行はれて來たのである。或る者が家に家を建て連ね、畑に畑を增し加へつゝあつた間に、家屋、地所及び富の全體は殆んど何等の變更をも受くることがなかつた。國民的資本其の者は依然として比較的に殆んど何等の變化をも蒙ることなくして殘存する。之れに反し、一國民が漸次富裕と爲り、他のものが貧困と爲る

ことなくして、吾人は寧ろ多數の隣接國民が同一の歩調に於いて繁榮と豐富とに向つて進み、若しくは等しく困窮と貧乏とに傾きつゝあるを見る。個人が概して既に存在する富の更らに更らに大なる部分を掌握するによつて次第に富裕と爲るの觀あるが如く、國民は前以つて存在することのなかつた富の生産によつて漸次富裕と爲るのである。是れ等の兩過程は一が「獲得」(acquisition)であり、他が「創造」(creation)であることに於いて相違する。(New Principles, pp. 11-13.)。

「何物も無より生ずることを得ない」(Ex nihilo nihil fit.)。存在する總べての物は原因を有さなければならぬ。吾人は個人が新たなる富を創造するによつて彼れ等の富を増加するを見ることなきが故に、吾人は一個人の富が如何にして存在するに至つたかを問はんとすることなく、是れ等のものが如何にして彼れの有に歸せるかを尋ねんとする。然しながら、吾人は諸國民が新たなる富を創造するによるの外、彼れ等の富を増加し得る方法を知らざるが故に、吾人は當然、諸國民の富の諸原因が何であるかを問ふのである。(ibid., p. 12.)。國民的勞働の適用せらるゝ精練、技巧及び明察の増加は該勞働の増加せる生産力に對する原因を、斯くて又、國民的富の増加に對する原因を吾人に提供する。(ibid., p. 13.)。發明は創造すると稱せられ得る唯一の力である。個人の追求する目的と國民の其れとが相同じからずして、前者の目的が獲得するに存し、後者の其れが創造するに在るが如く、其の使用する手段も亦相違する、勤勉及び節吝は個人の資本を増加する、其の最高且つ最眞なる意義に解せられた國民的富は總べての國民の富と等しく、亦、發明的能力の助けに由るの外、増加せられ得ざるものである。(ibid., p. 15.)。或る個人は他の者よりも勤儉であり拔目なきが故に、吾人は如何にして或る者が他の者に比して國民的基本、其の國民の有する貯藏を開くに資しつゝある手段若しくは用具のより大なる配分を自己の爲めに取得するに至り得るかを容易に了解し得るのであるが、而も如何にして、又如何なる目的の爲めに是れ等の手段若しくは用具の一般的増加が其の構造に於ける改良の一定の隨伴的發見なくして生ず可きかを了解することはさまで容易ではない。吾人は國民的資本の組成せらるゝ數多の小項目の何れかに注意するに由つて容易に之れを了解するを得可きである。(ibid., p. 19.)。個人は打禾棒を造るによつて資本を蓄積することを得たであらうが、國民的資本若しくは國民的收入の孰れと雖も斯くの如く指導せられた彼れ等の努力によつて多く増加せらるゝことがなかつたであらう。(ibid., p. 20.)。富の増進を節吝に歸するは之れを人口に歸するに等しかる可きである。一國の眞の富、力及び繁榮が其の人口の増加する際の外、増加し得ざるものであり、而して人口が、此の世を去る者よりも此の世に生れ出づる者多きによつてのみ唯り増加するを得ることは全然眞である。是れ等のものが其の資本の増加する際の外、増加し得ざるものであり、而して其の資本が、消費せらるゝ所よりも貯蓄せらるゝ所多きによつてのみ唯り増加するを得ることも亦眞である。然しながら、孰れの場合に於いても、是れ等のものは唯り人口の増加する際、若しくは蓄積の増加する際にのみ増加し得るものであるが故に、吾人は單に人口増加をして抑制せらるゝことなく進行するに委せ、若しくは單に蓄積をして抑止せらるゝことなく進行するに委せなければならぬと稱せらるゝの時、吾人は用語上に於ける一種の狡計によつて欺瞞せられ、不當の結論に導かるゝのである。(ibid., p. 28.)。人口が増加するに先き立つて、其の生存を得せしむ可き或る物が存しなければならぬ、資本が増加し得るに先き立つて、其の體現せられ得可き或る物が存しなければならぬ。生存資料を生産せよ、然らば、惡習が之れを妨止するに非ざれば、人口増加は次いで起るであらう、資本が存在したならば、そは大なる利潤を生ず可きことを示せ、然らば惡習が之れを妨止するに非ざれば、資本は蓄積せらるゝであらう。然しながら、人口を生存せしめ、又資本を使用する一定手段の存するまでは、是れ等

のものは、單に其の生産を奬勵するによつて斷じて著しく増大せらるゝを得ない。如何に有利なる收益が一方より取得せられ、又生存資料が他方より取得せらるゝを得るかを示して、最も適切に兩者の存在の原因と思料せられ得るものは發明である。（ibid., p. 31.）。

レーは、立法者が自國技術の發達若しくは外國技術の輸入奬勵によつて、其の社會の勞働に對して增加せる能率を與へんとする如何なる企圖をも差し控ふるを以つて得策なりと做すアダム・スミスの教義が、個人及び國民の富を增大する手段の完全なる同一性の想定に基礎を有するものであつて、誤謬なることを示さんとするに銳意であつた。彼れは加奈太の內地に農場を有する愼重にして聰明なる二人の兄弟を引例する。彼れ等の農場は如何なる種類の職人からも著しく隔つて居つた。彼れ等は種々なる職人の勤務を必要とし、而して是れ等のものに支拂ふの資力を有して居つたに拘らず、彼れ等は是れ等のものを使傭することが極めて稀れであつた、彼れ等の要求する殆んど總べての物品は兩家族の或る者によつて作られた。是れ等のものゝ中に靴類及び革製品があつた。彼れ等は之れを自己の農場に於いて製造せしむるが爲めに、一人の若者を遠方に送り、彼れ等の爲めに充分に是れ等の職業に熟達せしむるに努めた。而も彼れ等は彼れ等が斯くの如く投入せる費用は、是れに由つて彼れ等の爲めに成し遂げられた時間と經費の節約によつて報いらるゝこと三倍であると思惟した。（ibid., p. 58.）。何が故に一國の立法者は發明を誘入するが爲めに同樣の行動を取つてはならないのであるか。後世の所謂幼稚產業保護論はレーによつて本書第一編第二章に於いて力强く主張せられてゐる。

三

レーは本書第二編の最初の十章に於いて資本を創造し增加する諸原因の本質及び作用を論じ、第十二章及び十三章に於いて資本の增加を妨げ、若しくは既に存在しつゝあるものゝ高を減少する所のものゝ本質及び作用を論じ、而して第十二章及び十四章に於いて是れ等第一及び第二の諸原因の結合作用を論ずる。最後の第十五章は科學の列に伍せんとするアダム・スミスの諸原理の要求の檢討より成る。

レーに從へば、用具の形成によつて將來の欲望に備ふるは人間の特色である。而して這般の準備を行ふ彼れの力は自然的事物の經過に關する彼れの知識の範圍及び正確さに依存する。（ibid., pp. 80ff.）。レーは「用具」（instruments）なる名辭を、人が其の將來の欲望を滿すの目的を以つて物質的目的物の形態若しくは其の諸部分の排列に於いて行ふ改變の總べてに適用する。此の意味に於いて、農圃は用具であり、此の農圃に生育せしめらるゝ小麥は用具であり、小麥粉も亦、用具であり、而して麵麭も消費の過程に於いて存する時までは用具である。（ibid., pp. 87-88.）。總べての道具及び機械は用具であり、家屋、船舶、家畜、花圃、所帶道具、製造場、工業品及びあらゆる種類の貯藏は用具である。（ibid., p. 89.）。

總べての用具は下の如き三事項に於いて一致する。（一）是れ等のものは總べて人間の勞働によつて「直接に」形成せられたか、若しくは人間の勞働によつて形成せられた他の用具其の者の助けによつて「間接に」形成せられたものである。（二）總べての用具は人間の欲望の或るものを滿すの結果を惹き起し、若しくは之れを惹き起すに資し、而して後、消耗せしめられる。彼れは、諸物を用具の部類から用具ならざる物に變ぜしむるの經過を指示するが爲めに「消耗」（exhaustion）なる名辭を使用する。（三）用具の形成と消耗との間には時の間隔が介在する。或る用具は容易に場所を移すことを得るも、他のものは然るを得ない。前者は財貨若しくは貨物と稱せられる。（ibid., pp. 91-94.）。

あらゆる用具は各々が是れ等のものを形成するに費された勞働を倍加するに等しき結果に歸する期間、若しくは是れよりも先きに消耗せらるゝことがないとするならば、斯くの如き結果に歸す可き期間によつて決定せらるゝA BC以下Zabc等の等級に配列せらるゝを得可きである。A級の用具の形成費、能力及び形成の時期と消耗の時期との間に經過しつゝある時間の相互に對する關係は、是れ等のものが一箇年内に其の形成に費された勞働を倍加するに等しき結果に歸するか、若しくは是れよりも先きに消耗せられないとするならば、斯くの如き結果に歸す可きものであると言ふによつて表明し得らるゝ底のものであり、B級の用具に於ける是れ等のものゝ間の關係は二箇年内に是れ等のものが之れに費された勞働を倍加するに等しき結果に歸し、而して其の際に消耗せらるゝ底のものである。(ibid., pp. 100-101.)。彼れは或る一定社會によつて形成せらるゝ用具の高を決定する諸原因を以つて次ぎの四と觀る。(一)之れによつて所有せらるゝ素材の數量及び品質、(二)有效なる蓄積欲 (effective desire of accumulation) の强さ、(三)賃銀率、(四)發明的能力の進歩が是れである。(ibid., p. 109.)。後年、ジョン・スチュアート・ミルは恰も人口增加の問題に關してマルサスの有名なる『論文』を引用することを得るに等しき信頼を以つて、資本增加の問題に關してレーの『經濟學の新原理』を引用することを得ると做してゐる。「余の知る如何なる他書に於いても、資本の蓄積を決定する諸原因を原理及び歴史の兩者から、斯くの如く著しく明瞭ならしむることがない」と。(John Stuart Mill, Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy, vol. I, 1848, pp. 196-197.)。レーは是れ等の四原因の中、主として第二及び第四を考察する。

四

レーを以つて觀れば、單なる自己の利益に對する相當の顧慮は、大多數の人々の見積りに於いて、現在を極めて遙かに將來の上に置く可きであるが、而も其の外に、現在享有せられ得るが如き快感が概して其の分前に與ることを激勵しつゝある一の熱情を覺醒することを注意す可きである。欲求の直接對象が現實に胸中に存することは、注意を喚起するに由つて、恰も、之れの上に其の目的を定む可く總べての心力を激發せしむるものゝ如く、而してそが是れ等のものゝ即時の占有に對して提示する頗る鮮明なる享樂の概念に是れ等のものを導くのである。數年の先きに於いて吾人に提供せらる可き將來の幸福の見込は斯くの如き瞬間に於いては不鮮明且つ不確實なるの觀があり、而して日の光が强く照しつゝあるものであり、又恰も吾人が捕捉し得る距離に存するあらゆる其の新鮮さに於いて吾人に示されつゝある對象に比して輕視せらるゝの傾きがある。今日享有せらる可き善事が今より十二年後に享有せらる可き正確に同樣なる善事と頗る相違せる重要性を有するやうに觀ぜられない人は恐らく一人も存することがないであらう、――縱令ひ兩者の到來が等しく確實であつても。(Rae, op. cit., p. 120.)。

彼れに從へば、蓄積に對する欲求は主として三個の事情から力を取得するが如くである。(一)其の社會を通じて、社會愛及び仁愛、若しくは、如何なる名稱によつて知られ得るにせよ、吾人が他の者に傳達する善事よりして吾人を導いて幸福を取得せしむる原理の行はるゝこと、(二)知力の範圍及び之れが結果たる其の社會成員の胸内に於ける反省及び戒心の習性の有力なること、(三)其の社會の事態の安定並びに其の社會を通じて法及び秩序の支配することが是れである。そは之れに反する三個の事情によつて弱められ、直接享樂欲に對して力が與へられる。(一)社會愛若しくは仁愛に於ける强さの缺乏並びに反對原理たる純然たる利己的滿足欲の優勢なること、(二)知力の缺乏及び其の結果たる反省及び先慮の習性の不足、(三)其の社會の事態の不安定並びに其の社會を通じて法及び秩序の普及不完全なることが是れである。(ibid., p. 124.)。

次いでレーは狩獵及び牧畜民族、支那帝國、近代歐洲及び古代羅馬人等の種々なる社會に於ける有效なる蓄積欲の強さの種々なる程度より生じつゝある一定の諸現象に就いて述べる。「永續性は蓄積の有效なる強さの高度を指示しつゝある主要なる性質の一である。旅行家の所言は支那人によつて形成せらるゝ用具を以つて歐洲人によつて構成せらるゝ同樣の用具に比し頗る永續性劣れるものと做してゐる」。(ibid., pp. 151-152.)。ミルは是れ等の點に關し、レーよりして長き引用を行つてゐる。(Mill, op. cit., pp. 199-206.)。レーは進んで、業務の分割、並びに用具の消耗を促進せんとするの努力によつて生ぜしめられたる其の他の現象に就いて述べる。人類が自然の經過に就いて有する知識が進歩し、而して彼れ等が其の將來の欲望の爲めに備ふ可きより多數の手段を發見する時は、彼れ等が這般の目的の爲めに使用する用具は頗る多樣と爲る。織匠、鍛冶工、大工、農民の技術の行使は其の續行せらるゝを得可き著しく多種多樣なる道具の存在を包意する。斯くの如くして、あらゆる人が常に種々なる技術に從事す可き場合には避け難い用具の無爲無用に横はることを免れ、斯くて又、是れ等のものは更らに急速に消耗せられて、更らに迅速に報償せらるゝ部類に移る。(Rae, op. cit., p. 164.)。

這箇業務の分割は貨物交換の必要を生ぜしむる。(ibid., 166.)。總べての交換に於いて單に勞働のみが關與する限りに於いては、一物件は他のものと、各々の上に其れ其れ適用せられたる勞働に比例せずして、欲望を滿足せしむる力に於いて是れ等のものに等しき他の物品を製造するが爲めに、各々が構成せられたる其れに類する材料の上に適用せらるゝを必要とする所のものに比例して交換せらるゝであらう。此の柳籃が彼の麥稈帽子と交換せらるゝとしたならば、各々は二日の勞働を費したであらうが、そは正確に各々が二日の勞働を費したが爲めではなく、前者と等しく良好なる籃若しくは後者と等しく良好なる帽子の孰れと雖も二日の勞働よりも少なきものに對して製造せられざるが爲めである。是に於いて乎、或る物品が以前よりも少なき勞働を以つて製造せらるゝに至る毎に、先きに製造せられた同種の物品は從前に比し交換に際して、其の所有者に他の物品をより少なく取得せしめる。彼れ等は現實に是れ等のものに使用し盡されたる勞働に對せずして、現在に於いて是れ等のものに等しき他のものを製造するが爲めに要せらるゝ所のものに對して交換を行ふ。(ibid., p. 168.)。爰に後年ケーリーによつて唱道せられたる再生產費說の豫示が存する。

然しながら、正確に勞働が斯くの如き單純なる方法に於いて勞働に對して交換せらるゝが如きことは斷じて起ることを得ない。あらゆる用具の形成は、勞働以外に、或る他の用具の援助をも亦要求する。籃を造る者及び帽子を造る者ですら、彼れ等の要求する小枝及び藁を、是れ等のものを採集するの手數に對して取得することが出來るとして、前者は少くとも小刀、又後者は針と糸とを要す可きである。(ibid., p. 169.)。織匠が一反の亞麻布に織り込む可き絲を受け取り、而して三十日間に其の仕事を仕上ぐると假定する。今、彼れが其の報酬として單に三十日の勞働を彼れの註文主から受け取るとしたならば、彼れの取得する所は餘りに少なきに過ぐるであらう。蓋し、彼れの織機は該亞麻布の製作に際して幾分消耗せらるゝ用具たるが故に、這般の消耗は當さに其の勘定に於ける一項目を形成す可きである。該個人の有效なる蓄積欲は七ケ年間に倍加しつゝあるG級に彼れを誘致するに足る强さのものであり、其の織機は一百日の勞働を費し、而してそは七ケ年間に消耗せらる可きであると假定するならば、そは該期間の終りに於いて二百日の勞働、若しくは之れに等しき價値の物を還付することを要す可きである。然しながら、其の報酬は斯くの如く長く延引せられずして、其の構成後直ちに日々這入り始める。次いで、現在の一日を七年後に於ける二日に等しく計算する人の評價に於いて、年々の返還が七年後に於ける二百日に等しき所のものを

推算したならば、そは略々二十日と爲るであらう。吾人は、其の織機が一ケ年三百日使用せられ、斯くて是れ等の原則に基き、そが其の操作せられつゝあつた毎三十日に對し二日の勞働を返還せられざるを得ざる可く、從つて又、其の織匠が三十二日の勞働に等しきものを收受せざるを得ざる可きことを認むるを得可きである。少くとも彼れが九分通り迄、之れを受くるの確實性を有することがなかつたならば、彼れは其の用具を形成することがなかつたであらうし、又斯くの如き報酬が終止したとしたならば、彼れは再び之れを構成することがないであらう。唯り勞働のみが償はるゝの觀ある場合に於いてすら、時間は又、概して考察せらる可き項目の一を形成する。（ibid., pp. 169-170.）。

業務の分割及び其の結果たる交換の制度の一般に行はるゝことは用具の特殊の分類を生ぜしめる。業務の分割が生ずる以前に於いては、あらゆる人が形成し、若しくは形成せしむる用具は彼れの直接使用を目的とするものであり、而して其の生じた後に於いても、個人が斯くの如き目的の爲めに保留する部分は猶ほあらゆる社會に屬しつゝある全體の用具の著大なる部分を構成する。個人若しくは社會によつて保有せらるゝ全體の用具の此の部分は直接消費の爲めに保留せらるゝストック（stock reserved for immediate consumption）と稱せられる。自餘の部分は、現實に耕作せらるゝものと看做さるゝことなく、耕作せらるゝの資格を有するものと看做さるゝ土地を除き、資本（capital）と名附けられる。斯くの如き名辭の適用せらるゝ用具は、其れ自體、直接に彼れ等の所要に適する物品に交換せらるゝを得る貨物たるに由り、若しくは斯くの如く交換せらるゝを得可き貨物を生産する彼れ等の能力によつて、間接に是れ等のものを所有しつゝある個人の將來の欲望を充足する。資本は又、固定（fixed）及び流動（circulating）資本に小分せられる。固定資本は交換せらる可き貨物を生産するの能力を有するも、而も其れ自體交換せらるゝが爲めに形成せらるゝことなき用具から成立する。流動資本は交換せらるゝに適する貨物、若しくは斯くの如き貨物に形成せらるゝ過程に存する用具より成る。（ibid., pp. 170-171.）。

總べての用具は欲望を充足し、若しくは人間の勞働を節約するの能力を有する。然しながら、其の充足する欲望及び其の節約する勞働は概して即時のものではなくして、將來のものである。是に於いて乎、吾人は明日及び今より五年若しくは五十年以後に節約せらるゝ勞働若しくは充足せらるゝ欲望の同一量を相互に同一價値のものとして評價することを得ない。是れ等のものを比較するが爲めに採用せらる可き自然的尺度は當該個人が自ら現在及び將來に就いて形成する相對的評價、即ち其の特殊貨物の有效なる蓄積欲の强さたるの觀がある。斯くて其の有效なる蓄積欲が之れを五ケ年に倍加しつゝあるE級の用具の形成に誘致するに足るの强さを有する一社會に於いては、五ケ年の終りに於いて二日の勞働に等しき報酬を生ずる用具は明かに一日の現在の勞働に等しきものと評價せられたであらうし、若し十ケ年の終りに於いてそが四日の勞働に等しきものを生じたならば、そは又現在に於いて一日の勞働と見積られたであらう。是に於いて乎、斯くの如きはあらゆる社會によつて所有せらるゝ用具の全能力を今日の勞働に於いて表明する方法であり、而して其の社會の絶對的（absolute）ストック及び絶對的（absolute）資本なる名辭が之れを表示するが爲めに適用せらる可きである。（ibid., pp. 171-172.）。

然しながら、諸社會に屬しつゝある固定及び流動資本及びストックが通常評價せらるゝ方法は之れと相違する。或る特殊の貨物があらゆる他の用具の歸せらる可き標準として選擇せらるゝが故に、あらゆる社會に屬しつゝある用具が現實に交換せらるゝ際に相互に是れ等のものを比較するに依つて之れを評價するを常とする。斯くの如き方法に於いて評價せられたる資本及びストックに對して、諸社會の相對的（relative）資本及びストックなる名辭が適

用せらるる可きである。(ibid., p. 172.)。商取引の機構の基礎は貨幣であり、而して金銀はあらゆる他の物よりも一般に貨幣として通用する。(ibid., p. 176.)。交換は又信用によつて行はれる。(ibid., p. 182.)。近代的銀行業務は總べての信用取引の總括及び銀行貨幣（the money of the banker）の發行より成る。(ibid., pp. 185-187.)。あらゆる社會に於ける其の導入は用具の交換を容易ならしむるに由つて、是れ等のものゝ消耗を早め、而して更らに急速に返還せられつゝある等級に是れ等のものを移し入れる。(ibid., p. 194.)。信用及び貨幣の使用が一般に行はれつゝあることは利潤及び利子によつて用具の報酬を計算する商人的方法を生じた。(ibid., pp. 195-6.)。斯くの如き計算法は讓渡の業務に從事する總べての者に取つて便利であり、且つ極めて完全に彼れ等の目的に適應するも、而も理論的目的に適用せられた際には、そは總べての實際的一般準則（practical general rules）が理論的一般原理（speculative general principles）として採用せらるゝ場合に陷り勝ちなる不利益に惱まされる。是れに從へば、ストックは一切貨幣によつて量定せられたるものと看做され、而してストックの高は單に貨幣の高、若しくは貨幣を齎す可き或る物として考察せられる。斯くて相異れる國々のストックは單に高に於いて相違しつゝあるものであり、又、同一國のストックのあらゆる增減は同質の分量の單なる加減と觀ぜられる。是れによつて幾多の迷想は生じつゝあるのである。(ibid., p. 197.)。

或る一定社會を組成しつゝある個人の大多數は、同一の諸原因によつて影響せられ、又同樣の風俗、習慣及び感情を有するが爲めに其の有效蓄積欲の强さに於いて相互に接近しなければならぬ。蓄積心が平均よりも弱き者、即ち浪費者は其の所有する用具を、彼れ等の將來及び現在に就いて構成する評價に從つて、其の價する所のものよりも以上に對して交換することが出來る、斯くて又、彼れ等は漸次是れ等のものを彼れ自身よりも蓄積心强き他人に讓渡す可きである。之れに反し、蓄積心が平均よりも强き者、即ち節儉家は自から浪費者によつて讓渡せられた用具を收受する。斯くて後者の節儉の超過量は前者の不足額と相平均して、其の社會に於ける讓渡し得る用具の全集團をして殆んど同一等級を維持せしめる。然しながら、漸次消耗せらるゝものであり、又直接に欲望を滿足せしむるものゝ多數は是れ等のものを消費しつゝある人々に屬せざるを得ざるが故に、一定の用具は讓渡せらるゝを得ない。(ibid., pp. 198-199.)。

五

レーは次いで發明進步の原因及び之れより生じつゝ結果に就いて述べる。概して蓄積心を强めつゝある其れに等しき、發明者たる人間の本質より生じつゝある發明の進步を決定しつゝある事情の外、彼れの生活する世界の本質、新たなる事件の續發を彼れの視域に展開し、彼れを刺激して之れを觀察せしめ、而して徐々に卑屈なる模倣心の妨碍的影響を減少せしめ、事物の一般原理を把握せしめつゝある變化に基く他の事情が存する。(ibid., pp. 224-225.)。發明の進步が用具に及ぼす結果は是れ等のものゝ中に改良を惹起し、而して之れを其の社會の蓄積心の要求するよりも報酬の速かなる等級に移すに存する。(ibid., p. 261.)。而してそは暫く利潤を昂騰せしむる效果がある。改良の導入に次いで生ずる高利潤率は其の社會の絕對的資本の直接の比例的增大を表示し、次いで其の相對的資本に對して附加を生ずる。之れに反し、有效蓄積欲の强さに於ける不足より生ずる高利潤率は其の社會の絕對的資本の增加、其の成員の收入の新たなる增加、公の負擔を支持す可き更らに大なる能力及び相對的資本の近寄りつゝある增加を徵示することがない。這般の差別の明確なる認識を缺けることは、アダム・スミス及び一定の他の著者をして高利潤を以つて概して有害なるものと說くに至らしめたるの觀がある。(ibid., p. 263.)。社會のストックに對して附

加の行はるゝは、蓄積及び發明の兩原理の作用を通じてである。ストック若しくは資本の蓄積（accumulation）は蓄積原理の作用を通じて是れ等のものに對して行はれた附加である。ストック若しくは資本の增大（augmentation）は發明原理の作用を通じて是れ等のものに對して行はれた附加である。ストック若しくは資本の增加は兩原理の結合作用によつて是れ等のものに對して行はれたる附加である。ストックの蓄積は利潤を減少し、ストックの增大は利潤を增加し、ストックの增加は利潤を增加し、若しくは減少することがない。(ibid., p. 264.)。

發明及び蓄積原理の作用が阻碍せらるゝことなくして行はれたとするならば、總べての國民のストックの高は漸次に、又連綿として增加す可きであつた。然しながら、一般ストックの進歩を阻止するか、若しくは實際に既に存在しつゝある高を減少するの傾向ある反對の原理が存する。是れ等原理の第一は虛榮心である。(ibid., p. 265.)。虛榮心は他人が有すると能はざる所のものを有するによつて滿足せしめられる。(ibid., p. 266.)。そは其の使用若しくは消費が際立つて目立ち、而して極めて僅少なる勞働を費しつゝあるものに比し、眞實の欲望を充すが爲めにより良く資格附けらるゝことなきか、若しくは唯だ僅かにより良く資格附けらるゝに過ぎざるに拘らず、多くの勞働を費す貨物の領有を要求する。是に於いて乎、吾人は斯くの如き諸貨物を是れによつて惹起せらるゝ出來事の作用から生じつゝある相對的物質的效果によつて測ることを得ない。斯くて這般の方法によつて總べての貨物の能力を決定するは不正確である。或る一定の貨物が、他のものと比較せられたる際に、單に其の虛榮心に對して與ふる滿足に於いてのみ之れに優れる限りに於いては、そは奢侈品と看做さる可きであり、其の物質的品質が眞實の諸欲望を滿足するが爲めに之れに與ふる能力に於いて他のものと匹敵する限りに於いては、そは有用品と看做さる可きである。改良は斷じて純然たる奢侈品の生產を容易ならしむることを得ない。蓋し、虛榮心の重んずるは其の物自體ではなくして、單に其の中に含蓄せられたる勞働の定量に過ぎざるが故である。其の生產に取つて必要なる勞働を減少せよ、然らば、汝は此の欲情の渴望する所のものを除去する。裝飾品としての眞珠は恐らく其の稀少性から殆んど其の全價値を取得するものであらう。其の價格を半減せよ、然らば同一の結果を生ずるが爲めに身に着けらるゝ分量は二倍たらしめらるゝことを要するであらう。是れ等のものをして少額の貨物を以つて取得し得るものたらしめよ、然らばそは最早身に着けらるゝことを得ないであらう。(ibid., pp. 285-286.)。總べての奢侈品は其の高に比例して其の社會に損失を來さしめる。是れ等のものゝ形成に使用せられたる勤勉は何等將來の欲望に對する準備をも生ずることなくして、空費せらるゝものと稱せらるゝを得可きである。全社會を一體と看做す時は、そは何等の欲望をも充足することがない。恰度或る者が是れに由つて引き上げられただけ、他の者は引き下げられ、一人の優越は爰に他人の低劣と等しからしめらるゝが故に、そは何等絕對の享樂をも與ふることなく、總べて相對的である。是に於いて乎、奢侈品生產の便を增加するは絕對的資本に對して何等の附加をも生ぜしむるものでない。斯くして浪費せらるゝ高は、あらゆる社會に在つて、利己的感情の强さと知力及び社會的仁慈的愛情の弱さによつて決定せらるゝの觀あるものであつて、斯くて又そは蓄積原理の强さとは逆である。而もレーは、虛榮心が斯くの如くして直接には其の社會のストックの增加を阻止するの作用を爲すものであるに拘らず、其の間接の結果の或る者は反對の傾向を有することを認めてゐる。(ibid., p. 290.)。

著者は又相異れる社會の間に於ける交換に就いて述べる。相異れる社會の成員の間に起る交換は各々によつて製造せられた貨物中に含蓄せらるゝ勞働の高、並びに其の適用の時期によつて規制せらるゝことを得ない。(ibid., p. 301.)。有用品の交換に於ける便益の增加は發明及び改良の進歩と同樣に作用し、而して報酬のより急速なる等級

に用具を移す、(ibid., pp. 301-305.)。之れに反し、奢侈品の交換に於ける便益の增加は報酬のより遲緩なる等級に用具を移すの直接傾向を有する。(ibid., pp. 305-309.)。然しながら、純然たる奢侈品は極めて尠少なるが故に、相異れる社會の間に於ける頗る多數の貨物の交換より生じつゝある效果は有用品及び奢侈品の交易によつて生ぜしめらるゝ結果の複合である。(ibid., pp. 309-310.)。

諸用具の交換を妨碍しつゝある一切の事物は報酬のより遲緩なる等級に是れ等のものを列するの效果を有さなければならぬ。そは消耗の時期を延長し、若しくは形成の勞働を附加しなければならぬ。(ibid., p. 313.)。諸社會間に於ける用具の交換は制限、禁止若しくは戰爭によつて妨害せられる。諸社會間に於ける有用品の交換の遮斷は材料を奪ふによつて蓄積を抑止するも、而も、そは發明的能力を鼓舞して新たなる諸材料及び是れ等のものを用具に形成する新たなる手段を發見せしめる。(ibid., pp. 315-316.)。用具の形成は法によつて處罰し得可き詐欺及び暴行によつて個人に取つて困難と爲り、多費と爲る。(ibid., p. 318.)。

六

レーの信ずる所に據れば、アダム・スミスは經濟學を一個の經驗科學、歸納哲學の一部門たらしめたと稱せられて居つたのであるが、而も『國富論』の著者の哲學的精神は全然歸納哲學、ベーコン哲學に相反して居つた。(ibid., p. 328.)。ベーコン卿は是れ迄常に二種の哲學、即ち通俗哲學及び歸納哲學、換言すれば、體系の哲學 (the philosophy of system) 及び知識の哲學 (the philosophy of science) とも名附けられ得可きものが存し、又存しなければならぬことを主張した。前者に在つては知力は自然現象を其の豫想せられるたる總念に從つて說明し、後者に於いてはそは愼重なる解釋によつて是れ等のものゝ間の眞關係を探求する。(ibid., p. 329.)。アダム・スミスの大著は通俗的原理に申つて既知の現象を說明するを以つて其の目的とする一の哲學的體系として考察せらる可きものであつて、是れ等現象の連續を決定しつゝある眞法則の發見に導く歸納的研究と看做さる可きものではない。(ibid., p. 242.)。

『國富論』に於いては、分勞は發明及び改良、斯くて又資本の蓄積の偉大なる生產者と考へられる。而もレーを以つて觀れば、苟も或る人の能力を一の單調なる業務に限定する所のものは是れ等のものを刺激し展開するよりも、寧ろ之れを銷らし、之れを拘束しなければならぬ。擴張せられたる分勞は多數の技術と多大の知識の存在を含意する。斯くて其の存在する所に於いては、發明的能力は概して活潑なる可きである。然しながら、這般の活動は、分勞に伴ふものではあるが、其の結果として考へらる可きものではなく、其れ自體分勞を生じつゝある他の諸原因の結果である。略言すれば、そは結果であつて、原因ではなく、之れに先き立てる發明の進步を通じて存在するに至つたものであつて、アダム・スミスの想像するが如く、人事の進みに於ける一主動力ではなく、諸主動力の作用の結果である。(ibid., pp. 356-357.)。

七

レーは其の著の第三編に於いて、國民的ストックに對する立法者の工作に就いて論ずる。アダム・スミスは一千七百五十五年の講演草稿中に於いて、「一國を最低の野蠻狀態から、最高度の富裕に導くが爲めには、平和と輕易なる租稅と忍び得可き司法以外に殆んど何物をも必要とすることがないのである。蓋し爾餘一切のものは事物の自然的經過によつて成就せらるゝが故である。此の自然的經過を阻害し、事物をして强ひて他の水路に赴かしめ、若しくは特殊の點に於いて社會の進步を停止せんと努むる一切の政治は不自然であつて、其の存續の爲めには勞ひ壓制

暴虐たらざるを得ない」と論じてゐる。（昭和四年版拙著『經濟學史』二二—三頁參照）。斯くの如き原理は正式に『國富論』中に於いて表明せらるゝことがないが、而も全著作を通じて、又斯學に對する其の特殊の適用に於いて、彼れの推理の赴く結論の最も重要なるものを形成する。（ibid., p. 359.）。而もレーに從へば、自然は須らく自己の計畫を追求するに委せらる可きものであると云ふ假定よりして、立法的干渉を非とするの推定に對しては何等の根據も存することなく、推定は寧ろ、此處に於いても、又他處に於いても、人は叡智に於いて自然に反抗することを得ないのであるが、而も他處に於けると等しく此處に於いては彼れは自然の作用を指導することを要求せらるゝと云ふに在るの觀がある。（ibid., p. 361.）。立法者は諸外國より有用なる新技術を誘入して發明を刺激することが出來る。（ibid., pp. 363-368.）。立法者の力は又、奢侈品に對する愼重なる課稅によつて、全然個人の所得を侵害することなくして著大なる收入を擧ぐることが出來る。（ibid., p. 373.）。而して著者は最後に是れ等の點に於ける立法者の干渉に對する反對論に答へる。（ibid., pp. 375-385.）。

八

本書は米國の外交官にして著作者であつたアレグザンダー・ヒッチ・ヒヴァレット（Alexander Hill Everett）によつて其の『北米評論』（North American Review, Vol. XL.）誌上に於いて評論せられ、次いで前述の如くジェ・エス・ミルによつて其の大著中に引用せられ、更らに一千八百五十六年にはフェルララ（Francesco Ferrara）によつて編纂せられたる Biblioteca dell' Economista. の第一部第十一卷中に伊譯せられたのであるが、多くの注意を惹くには至らなかつた。（Mixter, op. cit., pp. xxxi-xxxii.）。其の後前揭ミックスター教授によつて彼れは墺の經濟學者オイゲン・フォン・ビューム・バヴァークの資本學說を彼れに先き立つて發見せるものとして紹介せられ（"A Forerunner of Böhm-Bawerk," Quarterly Journal of Economics, January, 1897, pp. 161-90.）、驀がてビームは其の大著 Kapital und Kapitalzins. の第一部 Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien. の第二版以下に於いて第十一章「ジョン・レー」を挿入して彼れの學說を論評し、是れと自己の學說との相違を明かにするに努め、（4. Aufl., 1921, S. 277-317.）、ミックスターは更らに之れを評論し、（"Böhm-Bawerk on Rae", Quarterly Journal of Economics, May, 1902.）、次いで一千九百〇五年に至つて前揭改訂版を公にして學界の注意を喚起した。

洵に本書はミルの言ふが如く、或る書籍が世にもてはやさるゝに至るは、其の品質の優秀なるに由るよりも寧ろ偶然の事實に由ること遙かに大なるを示すの一例として觀らる可きものである。（Mill, op. cit., p. 197 n.）。恐らく半ばは共通なる米國の環境に由つて、レーの書中には後年のケーリーの所論を豫示するものがあり、又米國滯在中に於いて學ぶ所の多かつた獨のリストの意見を暗示するものがある。レーの主眼とする所は固より後年のビューム・バヴァークの如く、資本利子に關する學說を展開せしむるに存せずして、國富の本質及び其の原因を明かにするに在つた。而して再生產費說を執れる彼れの資本理論が、限界效用說より出發せるビューム・バヴァークの其れと根本的に相違するものあることは多言を要せずして明かである。